被災者の視点で、被災者に寄り添う「ふれあい喫茶」を各地で開催

文：みやぎ生協　地域代表理事　大和（やまと）きよ子

4～5月には、津波で何もかも流された被災者のため、化粧品の割引セールを開催。店頭でおすすめも行ないました。

ほっと和める時間を提供したい

あの日3月11日は、ＪＲ田尻駅（宮城県大崎市）で大震災に遭いました。激しい横揺れ、立っていられないほどの縦揺れは初めての経験。高校の体育館に避難し、2日後に石巻の家族の待つ避難所にやっとたどり着きました。家も車も津波に流され、住み慣れた町一帯はがれきの山と化し、蛇田（へびた）店近くの仮設住宅に入居できたのは、2カ月間の避難所生活を経た5月でした。

みやぎ生協が県内に設置した4カ所のボランティアセンターの一つが、私の担当する蛇田店内にあります。センターでは、さまざまな被災者支援活動を行なっています。

例えば、土地勘のない場所の仮設住宅に入居された方々のために、お店や病院、銀行などのご近所マップを作成して配布したところ、役立つと喜ばれました。また、被災者の心に寄り添い、癒やしの場を提供しようと始まったのが「ふれあい喫茶」です。1回目は5月に石巻大橋店の店頭で、衣服や絵本のおゆずりコーナーと、木陰に椅子とテーブルを並べ、花を飾ったコーナーを設置しました。手作りのパンナコッタと野菜の浅漬け、お茶を無料で提供し、「こんなにおいしいものは震災後初めて」と喜んでいただき、約150人の参加者でにぎわいました。

6月からは毎週木曜日に蛇田店のキッチンスタジオなどで、10～14時までオープンカフェを開催。参加者は毎回100～120人と定着してきました。7月からは㈱伊藤園、松島医療生協、パン教室の講師などからお茶やケーキを提供いただき、15人のスタッフが交代で運営しています。女川町立病院、石巻渡波（わたのは）店、共同購入石巻支部などでも開催し、参加した多くの被災者からは、「また開いてね」と好評でした。

私たちの活動は、被災者の役に立っている

お茶会にいらっしゃる被災者一人ひとりの話にはドラマがあり、それらをノートに書き留めています。8月30日に石巻支部で開催されたお茶会の後、20人のスタッフで支部長を囲んでの反省会の時に、次のような話が出ました。

1歳くらいの赤ちゃんをベビーカーに乗せた年配のご夫婦にコーヒーを出したエリアリーダーが、「楽しそうね」と声を掛けられました。「私たちは震災前は幸せだった。息子夫婦のためにありったけのお金で店を作ったが、津波で店もこの子の母親もなくしてしまった。この先この子をどうやって育てていったらいいか」と泣きながら話されたそうです。

あまりにお気の毒で、このエリアリーダーは赤ちゃんを前に一緒に泣いたそうです。するとそばにいた70代の女性が、「私は45歳で夫を亡くし、子ども2人を女手一つで育てました。結婚した子どもに孫が生まれましたが、3歳の時お嫁さんが亡くなり、その孫も私が育ててきました。子どもは実によく大人を見ているもので、しっかりした優しい子で、今中学生になったのよ。大丈夫、いい子に育つから」と励ましたそうです。

そのご夫婦は、「今日来てよかった。力づけられました。頑張ります。生協さんありがとう」と初めて笑顔を見せたそうです。この言葉に、私たちの活動が被災者の役に立っていることを確信し、続けていくことをあらためて決意しました。

先の見えない行政の対応に焦り、いら立ちながら厳しい冬を迎えようとしています。これからも仮設住宅の中から、被災者の視点で、1人でも多くの方が笑顔を取り戻せるような活動を進めていきたいと思います。震災では多くのものを失いましたが、全国の生協の皆さんから多くの支援を受け、力強い絆を頂きました。感謝に堪えません、ありがとうございます。

蛇田店での「ふれあい喫茶」の様子。